

パスカルのデカルト弾劾について  
—デカルトはなぜ、「無益にして不確実」か—

児玉 正幸\*

On Pascal's Severe Criticism of Descartes

— Why was Descartes' Philosophy "Useless and Uncertain" ? —

Masayuki KODAMA\*

Abstract

Pascal was not only a physical scientist, but also a very pious Christian. Pascal was a Cartesian who drew a clear distinction between the soul and the body. However, he severely criticized the philosophy of Descartes for being "useless and uncertain". Why did he criticize it in these terms?

The two significant reasons why Pascal severely criticized Cartesian philosophy were as follows.

- (1) In his philosophy he needed God for the mere purpose of setting the world in motion. But such a God is "One of philosophers and scholars". Therefore Descartes' philosophy was "uncertain".
- (2) In his philosophy he would never speak of the religious truth: "God of love and consolation". As such Cartesian philosophy has nothing to do with our spiritual salvation, it's "useless".

KEY WORDS : *Pascal, Descartes, useless and uncertain*

はじめに

デカルトは、ガリレイ以来の近世の機械論的自然観に形而上学的基礎付けを与え、物心二元を峻別する近代合理主義の理論的基礎を築いた。デカルトの機械論的自然観（即ち、地上の物体の落下運動や投射体の運動に力学的法則（幾何学的直線運動の法則）を発見したガリレオ・ガリレイの立場を突破して、太陽系の惑星の運動にまで地上と同一の力学的法則（運動の三法則）の適用を拡大した、デカルトの力学的宇宙論）に象徴される、彼の

反スコラの思索態度（即ち、反目的論的自然観）に対しては、パスカルは完全に同一の土俵に乗っている。

けれども、自然探究の「学問的方法論」と「神観」では、パスカルは明確にデカルトとは一線を画している。例えば、デカルトの学問的方法は形而上学的思弁重視の演繹的推理であるのに反して、パスカルの採択する学問的方法は科学的実験と観察重視の帰納法である。また、両者の「神観」を比較すれば、デカルトの理性神学に対して、パ

\*鹿屋体育大学 National Institute Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

スカルの啓示神学、と区分することができる。

パスカルは自然を探究する学者（幾何学者・物理学者）であると同時に、学問研究に傾ける情熱以上に、神に熱い思いを抱き続ける地上のキリスト教的求道者であった。「精神の秩序」はもとより、それを越える「愛の秩序」にも所属するパスカルは、『パンセ』の中に、デカルトを名指しで弾劾する断章を6点残した。物体と精神の實在的二元を峻別するパスカルは、その点では歴然たるカルテジアンであるにも拘らず、デカルトはなぜ、「無益にして不確実」なのか。「私はデカルトを許すことができない」とパスカルに言わしめた理由の究明が、本稿の目的である。

以上の目的遂行のために、以下、パスカルによるデカルトの自然哲学批判を二つの視座から考察する。第一の視座とは、「精神の秩序」を知る近代的科学者、パスカルの視座（一）。第二の視座とは、「心情の秩序」を知る信仰の人、パスカルの視座（二）である。

### （一）第一の視座：「精神の秩序」を知る近代的科学者、パスカルによるデカルト自然哲学批判について

#### デカルトが「不確実」な理由

ストイシズム（ストア哲学）はルネサンス以来のユマニズム（人間中心主義）の思潮に乗って十七世紀初頭のフランスに復興した。復興するや、それはキリスト教と融合して、キリスト教的ストイシズム（ストア主義）として当代の知識層に広汎な影響を及ぼした。

両者融合の背景を少しく眺望しておく、ストア哲学の教えでは、「理性的自然に従って生きる」ことが理想的生活であった。自己の自由になるのは、自己の精神のみ。理性と意志の力で自己制御に成功すれば、人は完全な自由人になれる、とストア哲学は教える。一方、キリスト教では、厳しい生存競争が繰り広げられる世俗の営みに神の摂理を見て、悲惨な現状の忍耐強い受容を教える。そこで、自己の自由になるものと自由にならないものとを峻別するストア哲学が、乱世に神の測り

難い意思を見て、この涙の谷間（浮き世）の現状容認を迫るキリスト教と結びついたのである。

ちなみに、両者の相違点を考察しておく、キリスト教では、神への畏敬と原罪への恐れを教えるのに反して、ストア哲学は、理性と意志の力をたのんで、何物も恐れずに勇往邁進する態度を賞讃する。しかしながら、ストア哲学の立場は、「傲慢」に到る可能性が大である。その点を警戒したのがデカルトであった。また、デカルトよりも遙かに先鋭に、苛烈なストイシズム批判を加えたのが、パスカルであった。

確かにデカルト自らは、『方法序説』の中で、ストア派の哲学を、「砂と泥の上に築かれただけの、極めて豪華にして壮麗な宮殿」(Discours I. AT VI) だと、手厳しい価値判断を下している。ところが、パスカルは、ストア哲学の薫陶を受けたデカルト自身も実は、ここに帰属する代表的思想家だと想定している。『パンセ』に見えるデカルト弾劾の断章を確認すれば、

(デカルト。

大雑把にこんな風に言うべきである。「それは運動と形状から成っている」と。というのは、それは真実であるから。けれども、形状や運動の仔細にまで言及し、機械を構成してみせるのは、笑止千万である。なぜかと言えば、そういうことは無益であり、不確実であり、困難であるからである。それがよしんば当を得ているにせよ、私たちは、全哲学が一時間の労にさえも値するとは思わない

(L84-B79) (下線は引用者)。

本断章で弾劾された「一時間の労にさえも値しない」哲学とは、一体いかなる哲学を、パスカルは念頭に置いているのであろうか。それは取りも直さずデカルトの自然哲学に他ならない、と指摘するのは、ブランシュヴィックである(自版の註)。ブランシュヴィックによれば、単に哲学と言え、外的事物に関する知識、従って自然哲学に限定される、と言う。

批判対象は、確かにデカルトの『哲学の原理』第三部「見える世界について」と考えられるが、当のブランシュヴィック自身は、パスカルの生き

た同時代人、特にデカルトの用法分析から、本章で弾劾された「一時間の労にさえも値しない」哲学とは即自然哲学、と帰結しているにすぎない。そこで、以下、その論拠を考えてみたい。

まず、基本的に押さえておかなければならない事実は、形而上学的思弁を排して実験と観察を重視する近代的自然科学者パスカルの場合には、機械論的自然観を根源的に支える形而上学的原理は思弁されていない、という点である。つまり、パスカルの自然観には、形而上学的支柱としての自然哲学は存在していないのである。この点が、デカルトと同種の機械論的自然観に立脚するパスカルが、自然探究の方法論において、デカルトとは一線を画する所である。デカルトは理性に明晰判明に現れるものを原理とする幾何学をモデルに、アリストテレス以来の自然学（自然諸科学）を再構築する自然哲学を構想した。それとは対照的に、パスカルは理性に依拠する幾何学の方法の確実さを確信しながらも、こと自然学に関しては、理性による形而上学的思弁（形而上学的実体を始発とする演繹的推理）を全く排して、感覚的所与を実験で検証する方法を重視した。パスカルはデカルトと同様に、学問的に確実なユークリッド幾何学の方法を自然学にも応用するが、その際に、ロベルヴァル（『人間の義務と認識の原理』）らと同様に、感覚を真理認識の窓口とする実験的方法を提唱している。つまり、理性による形而上学的思弁を全く排して、実験と観察を重視するパスカルの自然観には、実験的検証の可能な科学的仮説はあっても、形而上学的支柱としての自然哲学は存在していないのである。そうであればこそ、デカルトの自然哲学は、近代的自然科学者パスカルには、「一時間の労にさえも値しない」となる。換言すれば、ガリレイに始まる近代の科学革命を推進するパスカルにとって、デカルトの自然哲学は実験的検証を欠いた壮大な形而上学的仮説であるが故に、デカルトの自然哲学は、「一時間の労にさえも値しない」となる。

また、パスカルの宇宙(1)がジョルダノ・ブルーノを想起させる無限宇宙であればこそ、感覚を理性と対等に真理認識の窓口とする実験的方法

に重点を置くパスカルの自然学の探究は、人類のやむことなき永遠の課題となる。パスカルにあっては、人間の身体を包む物理的空間には、「二つの無限」が認められる。ところが、自然的理性の立場からは、「二つの無限」の存在を知ることが可能であっても、その性質までは窮め尽くせない（L418-B233）。つまり、「無限小たる原理」への方向にも、「無限大たる帰結」への方向にも、自然的理性は到達できないのである。この角度から、引用の断章 L84-B79 を眺めれば、「形状や運動の仔細にまで言及し、機械を構成してみせるのは、笑止千万である。なぜかと言えば、そういうことは無益であり、不確実であり、困難であるからである。」、というデカルト批判に隠された、一つの意味が鮮明に浮かび上がってくる。

つまり、当該断章（L84-B79）は、理性並びに感性の限界とその適正な運用を弁えずに、自然界を運動する物質の因果（運動原因と運動）の連鎖をどこまでも辿り続けることが可能だと、楽天的な態度で自然探究に従事してきた自然哲学者に対する批判なのである。

換言すれば、それは、「理性の真理」と「信仰の真理」の区別を弁えない、理性の真理一点張りの古代の自然哲学者批判である。と同時に、それは、信仰の真理の存在を知りながらも理性の真理を信仰の真理に優先させる近代十七世紀の自然哲学者批判にもなっている（この解釈を補強する断章が、「人間の不均衡」と銘打たれた L199-B72）。

二つの無限の方向に広がる無機的空間は、それを探究する自然的理性（幾何学的精神・繊細の精神）に対しては、永遠の研究対象であると同時に、価値や善については、一切黙して語らない。二つの無限の方向に広がる無機的空間は永遠の研究対象であるが故に、「形状や運動の仔細にまで言及し、機械を構成してみせるのは」、「困難」であり、無機的空間は、価値や善については、一切黙して語らないが故に、自然的理性による物理的空間の探究は、本当の神（「理性」ではなく、「心情」で受信する神）を知る上で、「無益」である。そういうわけで、パスカルの場合には、心身両面において中間的存在たる人間を無限に超越する「この

無限の空間の永遠の沈黙が、私をおのかす(L201-B206)」ことになるのである。

実験と観察を自然探究の唯一の原理とするパスカルにとって、確かに、デカルトの物心二元の峻別は惜しめない讃辞の対象である。しかしながら、物質（即ち空間）の本質定義から始めて、最終的に無際限の物理的空間に充滿する物質の運動原因として、神を全自然の形而上学的原理に据えるデカルトの自然哲学全体は、近代的自然科学者のパスカルには、実験の検証を欠いた壮大な形而上学的仮説、夢物語に他ならないのである。故に、デカルトは「不確実」となる。

## (二) 第二の視座：「心情の秩序」を知る信仰の人、パスカルによるデカルト自然哲学批判について

### デカルトが「無益」な理由

次に、断章 L1001-B77 を取り上げて、パスカルによるデカルトの自然哲学批判の考察を深めていく。パスカルは「精神の秩序」を知る自然的理性の人であるだけではなかった。彼は「心情の秩序」を知る信仰の人でもあった。宗教的次元たる「心情の秩序」を知るパスカルの立場からすれば、自然的理性の要請として自然の第一原因として機械仕掛けの神 (Deus ex machina) を持ち出すだけで能事終われりとするデカルトは、自然的理性を過信する独断論的理神論者に他ならなかった。

私はデカルトを許すことができない。彼はその全哲学の中で、神無しで済ますことができれば、と願った。だが彼は、世界に運動を与えるために、神に最初のひと弾きをさせないわけにはいかなかった。それが済めば、もはや彼は神を必要としない (L1001-B77)。

自然的理性と感性の限界と運用を知る信仰者、パスカルの立場からすれば、デカルトの神は、自然界の因果の階段を上り詰めた第一階段に君臨する独断的理神論の神に他ならない。キリスト教の神はそのような第一原因としての神ではない。第一原因としての神は、理性の限界を知らない「哲学者や学者の神」(『メモリアル』BR IV)に他ならな

い。パスカルにとって、「デカルト哲学は、いわばドン・キホーテの物語にほとんど近い、自然に関する小説」(L1008)である。そこまでデカルトの自然哲学に厳しい批判を加えるパスカルの物理的宇宙には勿論、デカルトが採択した、とパスカルの考える自然神学的(宇宙論的)証明は、全く通用しない。

ただし、周知のように、『省察』第三や『方法序説』に見える、デカルト自身による神の存在証明には無論、自然神学的証明は登場していない。しかしながら、デカルトの宇宙生成論の二大仮説(『世界論または光論』AT XI, 『方法序説』第五部 AT VI, 『哲学の原理』第三部 AT IX)に依れば、神は初めに、無際限(2)の物理的空間(即ち、物質の世界)を創造した。次に神は、空間の海に一点の隙間無く充滿する物質(その本質は幾何学的延長)を弾いて、それに運動を賦与した。すると、宇宙空間に渦動が発生した、と語られているのである。そのような物質の運動原因として要請された神は、パスカルにとっては、宇宙論的(自然神学的)証明の対象となる第一原因としての神に他ならない。事実、『哲学の原理』第二部第三六節には、「神は運動の第一原因であり、宇宙において常に等しい運動量を保存している」(AT IX), とある。

そのような物質の運動原因としての神を持ち出すデカルトは、パスカルにとっては、弾効せざるを得ない独断的理神論者(自然神学者、理性神学者)となる。そこで、「私はデカルトを許すことができない」(ibid.)となるのである。

パスカルがデカルトを弾効する理由は、キリスト教の神はそのような理性的証明を過信する「哲学者の神」ではない、換言すれば、キリスト教の神は「学問的理性の真理」ではなくて、「宗教的真理の神」に他ならない、ということなのである。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」(『メモリアル』BR IV)こそ、キリスト教の生ける神だと、パスカルはデカルト批判を加える。パスカルの神は歴史の中に顕現する人格神。その神は又、旧約で預言され新約で成就された神人イエス・キリストを唯一の「仲保者」(médiateur)として初めて、人間と神との人格的交わりを可能にする啓示と恩

寵の神でもある。「イエス・キリストによる神。私たちはイエス・キリストによってのみ神を知る。この仲保者がなければ、神との交わりは全て絶たれる。イエス・キリストを通して、私たちは神を知る」(L189-B547)。自然的理性に依拠する限り、「私たちは、神についてはその存在も性質も知らない」(L418-B233)。パスカルにとって、「神を直感する(*sentir*)のは、心であって、理性ではない。信仰とはそうしたもの。理性にではなく、心に直感される神」(L424-B278)こそ、キリスト教の生ける神なのである。

しかし、パスカルから指弾されたデカルトはあらかじめ、『方法序説』第一部で、尊敬すべき伝統的啓示神学は学問的研究の対象にはしない、これから自分の論じるのは自然神学(理性神学)に他ならない、と研究態度を宣言している。

私は私たちの神学を尊敬していた。そして他の誰にも負けないくらい天国へ行きたいと熱望していた。しかしながら、天国への道が、最も学識ある人たちに対してと同様に、最も無知な人たちにも開通しているという事態を学び、私たちを天国へ導く啓示された真理が、私たちの理解を超越したものであることを学んだのちには、私は、そうした真理を私の脆弱な推理力の統率下に置こうとはしなくなった。そうした真理の吟味を企てて成果を収めるには、天上からの驚嘆すべき助力を必要とし、人間以上のものにならなければならない、と私は考えた(*Discours I, AT VI*)。

また、『哲学の原理』第四部最終節では、「全ての見解を教会の権威に委ねる」(*AT IX*)、とデカルトは心中を告白している。デカルトは、「私たちを天国へ導く啓示された真理」は敬して遠ざけ、「形而上学的原理としての神」、即ち「理性の真理」に、学問的研究の関心を振り向けることを、決意表明しているのである。では、パスカルはその事実を知らなかったのであろうか。

パスカルがその事実を認知していたか、否かはどうあれ、パスカルにとってデカルトが許し難いのは、「生ける神」に言及しようとしないうデカルトの態度である。「理性の真理」と「信仰の真理」

を区別する点では、両者は軌を一にしても、結果的には「宗教的真理(啓示神学)」を等閑に付するデカルト的態度では、人間の霊的救済には何の役にも立たない、とパスカルは批判するのである。『パンセ』の有名な次の断章、「無益にして不確実なデカルト」(L887-B78)は、当該の視座からも一層深く理解されなければならない。つまり、デカルトの自然哲学体系が「無益」なのは、それが、「キリスト教の生ける神の恩寵」、即ち「宗教的真理(啓示神学)」を閑却しているから。従って、それが人間の霊的救済に何の役にも立たないからである。また、それが「不確実」なのは、煩を厭わずに繰り返すならば、実験的検証を欠いた、演繹的推理に基づく壮大な形而上学的仮説、夢物語に他ならないからである(3)。パスカルの神は、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、…愛と慰めの神」(L449-B556)であって、「哲学者や学者の神」(*メモリアル BR IV*)では断じてない。即ち、啓示と恩寵の神、仲保者イエス・キリストを唯一の通路とする神こそが、パスカルの神だったのである。(L189-B547)。

## 引用略号

L : Blaise PASCAL, *Pensées sur la religion et sur quelques autre sujets*. Introduction de Louis LAFUMA, 3vol., Paris, Édition du Luxembourg, 1952.

B : *Pensées*, 3vol. = Tomes XII – XIV des *Œuvres de Blaise PASCAL*, par Léon BRUNSCHVIG, Paris, Hachette, Collection 〈Les Grands Écrivains de la France〉, 1904.

BR : *Œuvres de Blaise PASCAL*, par Léon BRUNSCHVIG, Paris, Hachette, Collection 〈Les Grands Écrivains de la France〉, 1904 sq.

『パンセ』からの引用は、上掲ラフュマ編『パンセ』(通称ラフュマ第2型、略号L)に依拠する。略号の次のアラビア数字は『パンセ』の断章番号を示す。『パンセ』以外のパスカルの著作からの引用は、上掲ブランシュヴィック編パスカル全集(フランス大作家双書版)(略号BR)に依る。

AT : *Œuvres de DESCARTES*, publiées par Ch. ADAM et P. TANNERY, 13 vol., Nouvelle présentation, Paris, Vrin, 1964 sq.

## 註

- (1) デカルトの宇宙は無際限 (『哲学の原理』第二部「物質的事物の原理について」AT IX)。有限の宇宙を唱えるコペルニクスとは対照的に、無限の宇宙を主張する代表格に、ニコラウス・クザヌスやジョルダンノ・ブルーノ、パスカルがいる。

そもそも、パスカルの立場からすれば、「自然は、いたるところがその中心でありどこにも周辺がない一つの無限の球体である」(L199-B72)以上は、同一の物理法則で貫かれた同質で無限の宇宙では、因果の階段は無限連鎖となる。その無限連鎖の果てに第一原因としての神を要請するのは、自然界に通用する因果の法則を、自然界と神の間にも類比的に応用したことになる。実験的検証を欠いた神の類比的要請に対して、デカルト哲学はさながらドン・キホーテの物語だと、パスカルはそしるのである。

- (2) デカルトは、可能的無限性としての無際限 (indéfini) と現実的無限性としての無限 (infini) とを区別して、前者は物理的空間の、後者は神の特性とした (『哲学の原理』第一部 AT IX, 『省察』第三 AT VII)。

	世 界	神
デカルト	無際限	無限
パスカル	延長の無限	部分をもたない無限

- (3) 「無益」(inutile) だというのは、彼の哲学が「なくてはならぬただ一つのもの」に触れていないから。「不確実」(incertain) だというのは、仮説にすぎないア・プリオリな原理の上に、その哲学の体系を構築しているから (ブランシュヴィック版『パンセ』L887-B78の註)、というブランシュヴィックの指摘は、正鵠を射ている。

また、「無益にして不確実なデカルト」という断章を解釈して、パスカルのデカルト批判の中心は次の二点、とする飯塚勝久氏の見解 (下記訳書末尾の解説) は、的確である。「一つは、科学者パスカルの眼から見てデカルトの自然学が不確実な、疑わしい代物だという点であり、もう一つは、かりにデカルトの自然学が真実であっても、それは宗教とはあくまで別の次元の問題で、それによって人間存在の矛盾—偉大と悲惨の両面を併せもつ存在者の罪と苦悩—が解決されることはないという点である。言葉を換えていえば、一方では科学的真理の探究に不必要な形而上学的仮説を持ち出して、科学的探究の道を歪めると同時に、他方ではこの形而上学によって人間存在の根本的問題を解決し得ると思いが上がることがパスカルから見たデカルト哲学の最大の疑問点なのである」(ジャン＝フランソワ・ルヴェル著『無益にして不確実なるデカルト』(飯塚勝久訳) 未来社, 1991年, 98頁)。